

平成30年度 第5回 四万十町文化的施設検討委員会

日 時 平成30年11月25日(日) 10:00～

会 場 四万十町役場本庁 西庁舎3F 防災対策室

出席委員 内田純一、谷口和史、山本哲資、林 一将、高垣恵一、林 伸一、
田邊法人、下元洋子、酒井紀子、刈谷明子、友永純子

欠席委員 池田十三生、川添節子、青木香奈子、中平浩太

事務局 川上哲男教育長

生涯学習課(林瑞穂課長、味元伸二郎副課長、森山典将主幹、松田佐穂主任)

図書館・美術館(長木千葉美、谷脇八代美、山口香、山地順子、井上千紗)

1 開 会

(事務局)

定刻となりましたので、第5回文化的施設検討委員会を開催します。

開催に当たりまして、内田委員長より一言挨拶をお願いします。

(内田委員長)

おはようございます。お忙しいところをお集まりいただきありがとうございます。

今日5回目ということで、いよいよ文化的施設の基本構想の取りまとめに向けてお話ししていきたいと思います。

この間、ワークショップ等をやってまいりましたが、やはり私たちの基本構想のベースはそこにあるんだろうとっております。今日までやってきたことをふり返りながらやっていければと思いますのでよろしくをお願いします。

(事務局)

ありがとうございます。

さっそく議事に入ります。最初に、前年度から今年度にかけて行ったワークショップ等のふり返りを、アドバイザーであるARGの岡本さんより報告という形でお願いします。よろしくをお願いします。

2 議 事

- ・これまでのワークショップ等の振り返り

(ARG 岡本)

では、お手元のワークショップ実施報告書をご覧ください。このあと配られている「基本構想目次・構成（案）」をご協議いただくに際して、どういうことがワークショップ等に出てきたかを確認していただけたらと思います。

【「四万十町文化的施設を考える町民・中高生ワークショップ実施報告書」の概説】

(内田委員長)

今日は、前半はワークショップ等全体でやってきたことの振り返りをやって、後半は基本構想に向けての協議にするように進めたいと思います。

まずは前半。岡本さんのほうから全体の振り返りを報告していただきました。最後のところで岡本さんは、「子どもたちの期待や思いに応える」という一つの大事なポイントがあるという話をしていただきました。それらを含めて、これらのワークショップ等をやってきたの、印象や感想を自由に話していただいて、それは当然あとに基本構想に繋がるので、繰り返しになる部分も出てきますが全然構わないので、まずは率直な意見をお聞かせください。

(酒井委員)

議題に合っていない話になるかもしれませんが、街歩きワークショップの時に、個人的にすごく残念だったのは、(施設を建設する) 場所が決まっているというのが前提にあったことでした。

時間も回数も限られている会の中で、白紙から全部自由に考えていいと言われた時に、私だけでなく PTA の方や最初のほうから参加していただいていた方も「決まってるなんて聞いてなかった」と言っ。やっぱりそういうところが認知されていないのに、最初は「自由に考えてもいいよ」と言っ。後出しで「やっぱり決まってるよ」と言われると、「今まで考えていたことは何だったのかな？」と思っ。とりあえずそこ、はい。

(内田委員長)

ありがとうございます。

その進め方は委員会としても非常にやりにくかったという、まさにそうですね。自由に物を考えるにくなってしまって、すごく反省しないといけませんが、この協議の中では場所のことは置いていいと思うんですね。むしろ、いつも町全体のことを考えて図書館を作りましょうと言っ。どこにあるとも、四万十町全体に繋がるという発想で、委員会ではできるだけ考えたい。最初にここ、となってしまうと発想が貧困になり

ます。現実、酒井さんが今おっしゃったということがあって、私も残念ではあります。

少なくとも基本構想を出していく段階においては、文化的施設はある特定のエリアだけの問題ではないので、どこにしようと全体をカバーできる内容で作っていかうという方向で考えていただいていいと思うんです。

ですので、十和や大正やどこに住んでいようとも、この文化的施設が期待に応えられるようにしていこうじゃないかと、ワークショップを通じて改めて感じるところです。

(刈谷委員)

場所の点について、私は酒井さんと同感なんですけど、それとはまた別で。

この資料の6ページの、中高生が今よく行く場所、行く場所、それから行きたくなる場所を考える中で出た意見で、東京や高知市のイオン丸中に負けないくらいという、自分の世界の外にある、普段は近くにはないけど時々行っていいなと思う場所とか、そういう場がないから本屋なんか欲しいという、これまで中高生が育ってきた環境が如実に表れていると考えがあって、そういう意味で言うと、中高生になってからそういう場所があったらいいというのもそうなんですけど、もっと小さい内から色々な人に会ったり文化に触れたり外へ行かせてあげたり、そういう大人の役割が大事だと思って、中高生になるとある程度自分の世界観って出来てくると思うんで、それよりも小さい時に、物理的に距離が遠いのであればITやデジタルの技術を使って、自分の知らない世界にたくさんたくさん触れさせてあげるのが大事だなと思ひまして、その例で言うと一番身近なのが絵本かなと。

本っていうのは『小さい時に会う本物である』って言うてる人がいるんですけど、そういうことと言うと子どもの囲まれて過ごせる環境を何よりも大事にしてあげたいなと思ひました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

私も中高生のワークショップに参加していて胸が痛む感覚がありました。そういう感覚を大事にしながらこの文化的施設を作っていきたいという気持ちがあります。

世界を広げるのはやはり大人の役割が大きいということですね。そのために最先端の技術を用いると同時に、具体的な話になりますが図書購入費が安くて本の種類が少ないのでは世界が広がらないわけですから、技術はもちろんですが、そもそも手に取れる本の種類や質が高いと、そういうところを目指したいですね。

(友永委員)

私も2回目のワークショップに参加させていただきましたが、四万十町で育った割には知らないことがいっぱいでした。

私の母が90歳を過ぎまして、母はすごく本が好きで図書館をずっと利用してましたが、

高齢になってくると足腰も弱くなってきて、行きたい図書館に行けないという現実が出てきて。

施設を作ることはとても大事なことだと思いますが、本が好きなお年寄りなどに向けて、四万十町はとても広くて行きたくても行けない人のことを考えて、本がそばにあるという環境をぜひ考えていきたいというのが現実的な考えとしてあります。自分自身も中高年になってきて、いつまでも車で通うことができるとは限らないので、私はそういうのも入れてもらいたいです。

(内田委員長)

ありがとうございます。

とても大事なことですね。本が身近にあるという状況を全ての人に対してどうやって作るか。図書館に行きたくても行けない方はどうしてもたくさん居るわけで、その人たちの身近に本や情報、あるいはこの文化的施設のサービスがある状況をどう作っていくか。もちろん子どもももさることながら、高齢者も。そういう大事な意見でした。ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか？

(下元委員)

皆さんご存知かもしれないですが、ハマヤのフリースペースで子どもたちが居るのをよく見かけます。何をしているのかというと、チームでプレイするゲームをしています。コンパクトなゲーム機があって、チームで対戦ということをしてますけれども、コンビニに一時期そういうフリースペースがあった時期に子どもたちがそこに行きたみたいで、コンビニに「ここでゲームをするのはいけません」って貼り出しがされてたんですね。

今回の文化的施設を作ることになった時に考えたのが、子どもたちが今はゲーム機なんか入手しやすくなって、ゲームで遊ぶというスタイルが結構出てきてます。

今の図書館だと静粛にしていなくてはいけないというルールがあるので、絶対ゲームをしちゃいけないんだと分かってるから子どもたちが来ないので、これを変えて、外で遊べる所を作って外で集まれる環境になっていけば、ゲームしか見ていなかった子どもたちが、文化的施設の面白い取り組みや本に興味を持って、もっと勉強や物作りに興味が行ってそういうスタンスになっていくんじゃないかなって普段から思っているんで、新しい文化施設に子どもたちがもっと気軽に行けるフリースペースだったり外のコーナーだったりを大事に見ていきたい。もしそこができないのなら私の持っている資源の中で作っていくべきだなと、子どもを持つ親としては思うところです。

(内田委員長)

ありがとうございます。

「くつろぎ」と「交流」という言葉を出していただけてますが、自由な空間ですね。それ

こそ何をしてでも大丈夫で安心してやれる場所が必要だし、そういう場から学習や次の展開が広がっていくことを大事にしたいと。原点ですよ。

配布資料にワークショップ 3 回分の成果をまとめていただいたページがありますが、これらと関連しながら今のご発言はさらに深めているように思えます。この点を頂きながら、もうちょっとご意見を頂きたいのですが。

(酒井委員)

最初のワークショップから経験して見ていて思ったのですが、日程や休みの日の関係など様々なことがあるので、参加人数は限られますが、どうしても同じ人が来て、新しい顔があまり見受けられなかったし、中高生ワークショップにしても大人のほうが断然多くて。

なので、参加しやすい場作りを事前に考えておかないといけなかったのかもしれないと思いました。ここで集まって打ち合わせるの大事だけど、それができない人用の場所を別に構えるべきです。ここで今後 IT がどうか VR がどうかお話ししてるけど、図書館が出来る前からそういうインフラを整えていたほうが、もっと多くの人の声が効率よく集められて、活発な議論ができるはずだと思います。

四万十町の行政の中で情報網をきちんと管理できたり、新しい HP なり、例えば図書館の HP があっていいはずなのに。

住民からの力で住民のための図書館を作ろうよという段取りを回すのもいいけれど、行政としてもその手助けのために、例えば HP を作っているから自由に SNS で繋がってもいいし、積極的に場に関わっていけるような、誰でも時間と場所を選ばずに発言できるとか。図書館が出来る前から繋げる場所を作っておかないと、スピード感もないし、出来上がってからだとな得できないものが出来るような感じがすると思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

この 3 回のワークショップをやってみてどうかでしたが、これではまだまだ不十分だし、創設において元々意見を聞けるものを同時に動かしていくのが必要じゃないかということですよ。それをやれる状況を作らないと結局役所が作ったんじゃないかというのをできるだけやめたいというのがこの会の意義ですからね。そこに立ち戻りながら考えていかないといけないと思います。

(ARG 岡本)

千葉県柏市という土地で図書館を作ることになって、多すぎるので数を絞ろうということになったんですが、数は減らしつつ、一部は建て替えていこうと。かなり市民の反響がでかいことになったんです。

例えば Facebook での情報発信をしたり、ワークショップの風景も公開したり。柏駅前に

ダブルデッキというところがありますが、そこで道行く人たちにひたすら声をかけまくるということをして。1万人くらいはアタックしましたね。40万人規模の街なので1万人でも全然いい気はしないんですがね。

こうやって「見せていく」議論は、今年度は構想段階なのでこれくらいかなと思いますが、例えば次年度以降、町民の皆さんが集まる所に出向いて、こんなことやってますよというのを、役場だけでなく委員の皆さんもどんどん町民の皆さんと語らいの場を持ったらいんじゃないかと思います。

これは柏市のご理解があったからですが、非常に盛り上がりました。ビブリオバトルをやったり、司書の方が読み聞かせをされたりして、さすがプロの技はすごいと皆さん改めて感じたり。それこそこの前来てくれた女子高生の子に絵を描いてもらうとか、そういうことをやれるようになるといいと思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

今、岡本さんからご提案もありましたので、そういう計画も考えてみたいと思います。他にいかがでしょうか。

(林(伸)委員)

僕は前回ワークショップに出られなくて、ちょうど第3回目のワークショップの報告書を見せてもらった限りでの感想ですが、気にかかる点が何点かあります。

例えばジオラマのスケッチとか、具体的な内容のことがいくつか入ってるんですが、実際、要望が出てるところでないような部分が見受けられる。VRだったり。最先端のものを入れるのは充分にいいんですが、最先端というのはすぐに古くなるので、今後どういう形で持っていくとか、使い方？ 大きい物を置けばみんなの目を引くからいいとかそうじゃなくて、後々使える物を編成していったほうがいいとは思いますが。場所が限られてくると思うので、あとで邪魔になる物ではなく必要な物を置いてもらえる。地域住民が使いやすいという点であれば、ここら辺は車生活なので駐車場がないと来られないんですよ。十和や大正からも来てもらうために建物作ったのに駐車場なくてどこに車停めるの？ そういうところが適当ではいけない気がするので、そこら辺は充分に検討していただいて、みんなが支え合っていると、使えるものにしていてもらいたい。

たぶんこれ、建てる時はまだ決まってないと思いますが、町のこの場所に建てたら一番人が来るんじゃないかという場所を検討させていただけるなら検討したらいいと思うんですね。言っちゃ悪いけど今ある図書館は学校から離れた位置にあるので、学生が使いたいのであればその近くへ持っていくべきだと思うし、もうちょっと町づくりをトータルで考えていったほうがいいのかなって僕は今発言として言わせてもらいました。

(内田委員長)

ありがとうございました。

これからまさに基本構想を作りながら、次の計画の時にも今のような議論はより大事になっていきますし、進めるほどにそういう話になっていくと思います。

(酒井委員)

柏市の時は、Facebook なんか載せて、市民間交流とか、でっかい LINE のグループとあるかもしれませんが、そういうのでコーディネートして拾ってるんですか？

(ARG 岡本)

柏市はとにかく市民数が多いので一部の議論にしてはまずいという問題意識は最初からありました。ですのでいくつかのことをしましたが、さっきの柏市の街中の最も人通りがある所で出店するというのが一つ。

あと、柏市内で本来図書館を使ってくれていいはずの人たちが集まっている場所に出かけました。いわゆるコワーキングスペースであったり、市民センターで一番人の来ている所。全体で 6 か所くらい出張ヒアリングをやっています。で、ここと同じようにワークショップをやって。正直相当あの手この手を駆使しまくった感じですね。

そこはやっぱり地図が大きいから手広くやらないと。大都市には大都市の悩みがあって、物事が決めにくい。特に柏市では、一部の地域で公共施設がなくなるという話なので、対応を誤ると大炎上になるという認識があります。

柏市では柏市市民による Facebook のグループがあって、数万人単位で参加されていますが、市民の方が運営していますが市からのお知らせもそこに投稿しています。それによって普段はあまり行政に関心がない方にも目に留めていただくようにしています。ですから今後そういうやり方は充分ありうるかと思います。

逆のケースでは、今年 7 月にオープンした沖ノ島のコミュニティ図書館の場合。人口が 3,000 人を切ってますので、片っ端から全員組織化して、数百人規模でグループを作っておいて、プロセスがとにかく見えるようにする配慮はしました。西ノ島は最初反対派も多くて、町内に怪文書が出回るとか出だしが波乱だったので、とにかく包み隠さず全部出すのを徹底しました。結果的に良かったのは、反対派だった方たちが熱心なサポーターになってくださって、図書館とコミュニティスペース両方を兼ね備えるんですが、コミュニティスペースの運営は行政が何もかもできないので、基本持ち込み企画に依存する形に最初から決まってきました。今のところ、ものすごい活発です。町立図書館規模では来館者数が記録的な数になるんじゃないかと。すでに 1 万人を超えているので。町の人口が 3,000 人、周辺離島を合わせても 1 万人に満たないので、おそらく町民はすでに一人 2、3 回来ている状況です。そこは上手く盛り上げていくと。

四万十町においても、行政が何もかも手取り足取り住民サービスするのは難しいですの

で、皆様がどういうふうに使いたいかを言える環境を作っていくって、実際にオープンした時には順番待ちの行列が出来るくらいになっているのが一番よいと思います。そういった点は私どもも関わっていきますのでぜひ提案させていただきたいです。十和でも大正でもヒアリングとかで。どうしてもここ中心になってしまうので。私ももうちょっと十和・大正に行って地域の方々の話を聞いてみたほうがいいかと思います。

(酒井委員)

さっき言った、何も聞かされずに場所も決まっていたっていうの、人が離れるわけですね。以前は、あまりにも声を広げ過ぎるとパンクするので先に決めておくのがベストだったかもしれませんが、時代も変わってきて、声って拾えるだけ拾えたほうが、岡本さんは有効だと思います？

(ARG 岡本)

原則的には聞いたほうがいいと思います。ただし、専門家の立場で言うと、住民の声にひたすら耳を傾けまくるのもまずいということです。それが行き着く先は、過剰な行政サービスでの破綻です。

私たちの仕事の理想として望ましいのは住民による自治です。行政が何もかもやってしまうのではない。原則的に、そうしないと四万十町規模の自治体は破綻します。必ず夕張市のようになります。ですからできることは自分たちの手で貫いていくのが大事です。行政が手を引いてあげてしまうこと自体が実は夕張市にまっしぐらという気もしています。

私としては、町民に求めるのはまず会を傍聴に来ること。議会を傍聴して議員さんに話を聞くこと。役場の方にも話をする。町民側の主体性も引き出していかなければいけないと思います。どうしても従来の流れからすると、多くの法的機関・役所は秘密主義に走る傾向があるんですが、一方で「ただ言うだけの住民」の存在も大きいんです。住民側から一緒に作り上げていこうという姿勢が大事だと思います。

そして最後に、決断することにおいては、町民の代理・代行者である行政を信頼してあげてほしいです。例えば場所の問題は非常に難しく、どこに建てたってもめるんです。正直、正義はありません。ファイナルアンサーもはっきり言ってありません。ほぼ既定です。決めた所で最善を尽くすしかないのであって、どこにしようが不満は出るんです。窪川の中であっても、「うちの近くがいい」とか「あっちに行つてほしい」とか当然あるわけです。ただ、いわゆる迷惑施設ではないわけでまだハッピーなほうですけど、決めていくプロセスで、時として中長期的な地域サービスを考えている行政を信じてあげたほうがよいこともあります。全ての声に従えという、かえってポピリズムになってしまつて、結果的に全体でみると「え!？」っていう場所が選ばれることも残念ながらあります。

総合的に見ていただくのが一番いいです。この先、議論を詰めていく必要があります。場所に納得しないのも、四万十町全体を見ればどういう視点を見いだせるのか、あるいは行政

サービスの手順を緩やかに示されてくると、皆さんも合点が行くことも出てきますので。私の個人的考えでした。

(刈谷委員)

柏市での街頭聞き込みをしていたのは ARG 社員さんですか？

(ARG 岡本)

ARG のスタッフ、図書館職員の正職員、かつお手伝いのボランティアの方々。総勢 20 名くらいですね。

反応はよかったですね。大部分の方が、今こういうことをやっているをご存知なかったの

で。柏駅前の人通りの多い所でやることになって幟を出したので、「あれ何？」という人たちが増えた。結果的に各家庭で話題になってワークショップにも申し込みも多くて、今までい

(刈谷委員)

思ったんですけど、四万十町規模だと全員の声を拾うのは難しいけど、西ノ島町のように数百人規模のグループを作るとか、住民側も待っているだけ、チラシが回ってくるだけではなかなか参加はできない。行政サービスも、全町民に電話してくださいってわけにはいかなくても、公と民の距離が近づくような働きかけとして行政側から、例えば学校図書担当の先生に（何かしらのイベントが）あることを伝えて呼びかけるのは不可能ではないと思っています。

役職柄の関係者や、文化的施設にそう遠くない立場にいる方に一声かけるだけで、かなり違うと思います。参加者に自分たちも関わっているという意識が増える。そういう少しずつを積み重ねていくことが結果的に全員の声を拾うことに繋がると思います。

ワークショップをせっかく ARG にやってもらう時に、チラシを全戸配布しました、ではなくて、個人的に一人二人声かけをする。委員会の中でも、どういう人に声をかけたらいいか意見を募る。もっと工夫のしようがあるのではないのでしょうか。

(内田委員長)

ありがとうございます。

もっともっと、今の意見を踏まえてこれからのことを進めていきたいと思っています。色々な場面でそういう機会がありますので、声の拾い方を研究実践してみるのことは大事なことです。

(ARG 岡本)

智頭町では町民 7,000 人中 70 人でワークショップをしました。1%（の町民）が来てい

て、70人に達した頃からほぼ町民意見は割れなくなりました。1%が来るようになると、各家庭レベルで数千名超えなので、それこそ反対派であった議員さんたちも納得されました。

智頭町も最初からそこまで行ってたわけではありません。一昨年は我々から町民に非常にお願いしました。「次回は誰か連れて来てください」と。

行政の声かけには限界があります。役所がいくら言っても、最初こそ役所に言われたから行くという人は来ます。大事なのは、お友達などに誘われたから来たという人たちなんですよ。70名がいま受入数の限界ですが、半分以上は町民がリクルートしてくれた方です。仲のいい友達が一人行ってくれると来やすい。行政のこういうことをしたことがない人がやると、役所にちょっと言われた程度で来るのはハードルが高いです。そこは町民同士の声かけこそが最も重要、仲間を増やす最大の戦略になります。

(下元委員)

さっきお伺いした例が Facebook の話でしたが、新しい施設を作った時にそういう形で誰かが Facebook を担当して、町民が図書館のしていた事業などを投稿して、担当がこういう投稿があったとアップしたりするのは可能でしょうか。可能でしたらぜひやっていただけたらすごく助かります。十和の住民にもお知らせできますし、情報交換が発展すると思えました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

作るプロセスにおいても多くの人に呼びかけていく。同時に作ったあとでもどんどん情報発信をしていく。そういう仕組みを持ったものを作るという意味では、プロセスの中でそれがどれくらいできるかが大事になりますよね。

このあと委員会としては基本構想をまとめていきますが、もっと多くの人の声の拾い方で考えていることがあれば(意見を)出していただいてから次に移ろうと思うんですけども。

(酒井委員)

柏市のようなやり方をもし四万十町でするならこの課が担当するのか、起ち上げるまでの期間はどのくらいかを聞きたいです。

それと、さっき岡本さんがおっしゃった、個人間で連れてくるのが一番強いとは思いますが、私は、人間がボランティアでやるのには限界があると思います。例えば四万十茶のペットボトルではないですが、一人連れてきたらこういうポイントがあるよっていうのがあるかないかでは差があると思います。もしも(参加者を)連れてきてくれた人に特典という枠で予算があれば、ゲーム性があるって面白いというのも案です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

刈谷さんがおっしゃった、学校を通じて呼びかけていくことについては、教育委員会のほうで考えていただくこともできるかと思います。

情報発信についても、また全体で考えてもらうことがあるかと思います。

そのほか、色んなフェスティバルの時にテントを出すとかね、話も出ておりました。

このあと、構想を作って計画作りに移行していきますが、常にプロセスを見えるようにすることと、そのつど声を拾うことを重視しながら作っていきましょう。

(林(一)委員)

やはり町長の方針を考えまして、財政やお金の問題がかなり絡んでくるとは思います。また合併特例みたいな財源もあるのではないかと考えて、そうすると議会の対応とか行政的専門的なことがあります。そうすると期限が全然足りないじゃないかという思いがします。

そして、専門家の岡本さんのご指導もあって非常に高まっていますが、町民にはまだまだ検討会が行われていること（を知らせること）が徹底してないのも事実だと思います。

町を見ると、少子高齢化で人口も減っていますし、現在の予想でも1万人を割る人口が予想されていますがそこも考えて、いつの時点で動いてこの施設を作っているのかの意見も出さなければいけないと思います。

場所、内容などの面に視点を置いて進めていくべきだと思いますし、街歩きワークショップでも指摘が出ましたように子ども、町を歩く人をほとんど見ない事態になっています。繁盛しているのは2、3店のスーパーだけです。

さらにはこの四万十町地域は、窪川・大正・十和とそれぞれ変わった特性のある地域に分かれていますので、そういった意見を皆さんから聞きながら論議する必要がありますし、我々の責任は重いと思います。

(内田委員長)

ありがとうございました。

基本構想の話を頂きましたが、そちらに話を移しながら林さんのおっしゃったことを結び付けていきたいと思っています。

それではここから、お手元の「基本構想 目次・構成（案）」を岡本さんからご説明いただいて、協議してまいりたいと思います。

・文化的施設基本構想の内容協議

【ARG 岡本より、「四万十町文化的施設基本構想 目次・構成（案）」の概説】

(内田委員長)

基本的にはオーソドックスで、現状があり課題があり、私たちがやってきたプロセスの記録をしっかりと書き込んだ上で、施設づくりに向けたビジョン・コンセプト・アクションプラン、そして今後の計画とまとめていくということですが。

まず全体としてどうでしょうか？

1章2章のあたりには細かい部分で言いたいことはありますが、大体こういう流れだと。そして3章のビジョン・コンセプト・アクションプランでご協議いただこうと思いますが。

(林(伸)委員)

これは何回くらいやるんですか？

(内田委員長)

今日議論していただいて、次回の1月で、構想については確定の形にしてあります。

(林(伸)委員)

細かい話になりますが、今の時点でこういうものが欲しいと要望は出てきてますが、実際に建てるに当たっても、図書館・美術館の現場で働く人たちの意見をあまり聞いていない気がします。ここに何人か司書さんも来てくれますので、要望を聞いて意見を入れたほうがいいんじゃないでしょうか。

僕らは図書の専門でもないのですが、ただただ言いたいことを言うだけですが、(働く)人の意見も大事だと思うというか。使う方の意見が聞ける場はもうちょっとなかったのかと。

(内田委員長)

さっき色々な声を聞くのが大事という話が出て、特に働いてる方の意見が十分に反映されてないというご意見ですが、ここで確定させてしまうと働く方の意見を反映しにくくなってしまふという懸念があるのであれば、一回その繋ぎをする必要はありますが。

大きな基本構想の部分ですので、この間ずっとやってきたワークショップ等の意見の中にそういう方の意見も入れてやってこられたと思うので、もっと聞く必要は……

(林(伸)委員)

なかなか時間もないし大変でしょうが、結構働く人の意見ってすごく大事で。

自分の仕事柄、色々聞くんですが、周りの人が決めたものに働く人が入って使いにくかったというよりは、使いやすいもののほうが良いと思うんですよね。

(下元委員)

現実的な所も取り入れたいですね。本音はどうかという。

(林(伸)委員)

今の図書館なんかすごくやってくれているので、それが活かせる形に。

(下元委員)

現時点で頑張ってくださっている方々の意見もすごく大事だと思います。

(内田委員長)

このあと基本構想があって、基本計画の中にもそういう声をもっと丁寧に入れていくプロセスがありますので、今の時点でもっと聞いておいたほうがいいのであれば、しておく必要はあるんですが、まだまだ。

(酒井委員)

あまりにも時間が間に合わないんだったら、計画の中に入れてくれる可能性が高いのであれば、図書館職員だけの生の意見を集めたものを共有できる場を一旦作るとか。

最初から図書館員の話が聞きたいという意見は第1回からあった。せっかくこうしていらしてくださってるのにマイクを持ち回っているだけとか、そういうのはすごく申し訳なくて。そういう場が一つ提供されるっていうのであれば今日は無理にねじ込む必要はないですけど。

(事務局)

先ほど委員長からおっしゃいましたが、今年度は基本構想で大きな枠組みを作っていたと捉えていただいて、来年度は基本計画である程度肉付けした部分をお話していただいて、さらにもっと運営等については、サービス運営のための委員会もこさえて、さらに細かい肉付けをした部分を話していただくという考えをしております。その中で図書館職員にも入っていただいて、積極的に現場の意見を発言して、細かな計画の中に活かしていくという方向性です。

図書館員たちも今までのワークショップの中に入って、グループに入って話に参加する、短冊に書き込んでもらうなど、できる限り、専門家的な立場からどう在ったらいいかの部分を入れてもらう工夫はしました。

(内田委員長)

第3章に向けてのビジョン・コンセント・アクションプランを作る上で、職員体制、アク

セス、大正・十和への配慮の記述を書き込んで、より職員の意見を聞いていきたいと思いますとか、計画を作る段階ではもっと多くの人の意見を取り入れていく必要があるというようなことは書いておく必要があります。

この基本構想を作るところで、職員に中身について尋ねておいたほうがいいのは確かですが。

今日の構想から1月の会の時にはまとめたものをもう一度ご提案する流れですが、まとめる中身として、多くの人の意見を聞いて専門家の立場の声も入れておくというのはあると思うんですね。

じゃあ年内に職員さんの意見を聞く場を作ったほうがいいかというと、時間的には厳しいです。生涯学習課課長がおっしゃったように、ワークショップに職員もできるだけ入ってもらってはいて。

(林(一)委員)

今の意見ですが、町民の意見を聞くというのは一番大事なことだと思いますね。

細かいことまでは、委員会では決められない点もあるかもしれません。例えばこの役場庁舎が建つ時にも構想が出来まして、我々町民にも自由に参加して意見を述べてほしいという提案がありますよね。そういった機会を事務局が作ってくれると思ひまして、まだ決定もしない内にも、細かい町民の意見を入れる配慮はしないといけません。

(酒井委員)

じゃあもっと意見が言いやすいように、図書館員さんには手間がかかりますが、1月までに、構想について私たちはこんな思いを持ってますというものをまとめて、出していただけたら参考にすることにしたら出しやすいと思うんですけど。みんなが一気に12月と1月の間に集まるのが不可能でも、図書館員が自分から意見を言える環境を作ることではできると思うので。その言葉を受けて実行するかは別ですけど、気持ちがあることは提示できたらいいとは思っています。

(内田委員長)

じゃあこういうふうにしましょうか。

この委員会を受けて、職員たちがどういうことを考えているのかをまとめたものを出していただくと。

基本構想をまとめていただくのは岡本さんのほうですが、岡本さんに(意見を)お渡しする。もちろん我々が共有した上で。それで1月の基本構想に、その中で出た意見もちょっと加えていただく段階を一つ挟むことにしましょうか。どうでしょう？

(ARG 岡本)

スケジュール的に大丈夫ですか？

次回はもう草案になっていますよね。必ず事前にご覧いただかないと話ができません。こうすると 1 月の年明けには皆さん確定させておく、役場の中で確認していただかないといけない。となると、12 月下旬までにはとりまとめていただく必要がある。

果たして役場的に可能ですか？

(林(伸)委員)

作業的に難しいなら、あとからちゃんと取り入れてもらえる形を取るのであれば構いません。今後策定するビジョンとか、目標とか作ると思うんですけど、あとで出てきたものに対して（構想に）合っていないから駄目って話にならないようにしてはあげたい。

(ARG 岡本)

せつかく（意見を）集めるなら、構想が出来上がったあとのほうがいい。

構想ってとても広げた段階で、計画はこれを現実落とし込むわけです。構想についてはまだまだご意見は頂ける段階なので、委員さんたちで議論してまとまったものを、図書館・美術館、または役場の職員さんにも見ていただいて、気づいた点を言ってもらう。あるいは各課でやっている事業で繋げることができるんじゃないかと思います。

そういうご提案なんかも含めてリストアップしていただいて、次年度、検討委員会が計画策定を始める前に、役場の各部署からこういう声がありましたと聞いた上で検討を進める。そのほうが効果が大きいというか。別に短期間でやるのが嫌というわけではなく。

正直、年末年始にかけての役場はかなり忙しいんじゃないかと。そしたら多分、やる気はあったけど言えなかったというのが必ずあるので。それよりは十分に時間を取って、年度内で宿題にして、皆さんご協力くださいのほうがいい気がするし、役場の皆さんからしてもそのほうがやりがいがある気がします。

(内田委員長)

ありがとうございます。

方向としては、基本構想から計画に移る段階でまた広く意見を伺う。特に専門家、そこで働く方々のご意見を重視するというプロセスで進めていきましょう。

では、三章の「ビジョン・コンセプト・アクションプラン」の「ビジョン」や「コンセプト」で何か「言葉」を出していこうとのことで、何かご意見をいただければと思います。

(谷口委員)

将来的なビジョンのことからは脱線しますが、今の日本で図書館や美術館を新しく建てるに当たってこういう方法があるということを実感しました。今の時流はそう行っている

と思います。

日本の人口が減ってきて、読書する人口が比例して減ってきているかは分かりませんが確実に読書人口は減っていると。

僕が一番先に、図書館を建てるに当たって町を挙げてニュースになったのが何十年か前の北海道の恵庭市かな？ そこに町長の英断によって図書館が建って、そこに人が足繁く通うようになって、読書力が上がったと聞いてから久しいですが。

いつ頃からワークショップ、あるいは皆さんの意見を聞きながら作っていく方向に動いていったのか。多聞に僕はポピリズムが入っているような気がするんです。

英断、決断っていうのを最終的迎合で進めるんじゃないで、この町にとって何が一番大事で、この町の歴史・文化を伝えていくことがベストなのかを考えると、必ずしもそれはポピュリズムであってはならないのです。ただ住民参加によって住民意見を集約されて、そこに一番持ってくるのは何かと言えば、やっぱりそれはポピュリズムに繋がるけど、もっと危険な方向に向くこともあると思います。

そういう観点から、いつの時代からそうなったのか、日本全国で広く普及されているのかの実態をお聞きしたい。

(ARG 岡本)

情報公開制度の普及も大きく影響していますが、やはり公共的施設を作る上で住民参加型のワークショップをやるのは、ほぼ当たり前と言ってよいです。私どもも全国 25 自治体で仕事しておりますが、ワークショップなしの仕事はないです。必ず何かしらの形で住民とということはメニューとして入っています。これは平成に入ってから動向と言っていいと思います。特にこの 10~15 年にかけて一気に広がったという印象があります。

同時に、もっと前からやっている事例もあります。例えば佐賀県伊万里市。伊万里市民図書館は公共図書館の世界においてある種のスターとして、建って 20 年ほど経ちますが、市民の「図書館を建て替えよう」という声が大きく、それを受けて政策も動いて、市民も一緒に考えるというのを徹底してやっている図書館です。

伊万里市民図書館は年 2 回の大掃除があります。大掃除は行政だけでなく、外注でもなく、市民総出です。ボランティア保険をかけて、屋根の掃除も木の剪定も市民たちでします。そこが徹底されているんですね。

図書館の着工日と竣工日は記念日になって、みんなで集まってお祝いをします。そういうふうちゃんと施設が街に根付いている。これは究極の住民自治で施設の管理運営がされているケースと言えます。

こういう奇跡のような自治体が図書館に限ると決して珍しくありません。すごく明確な政策としてではありませんが、偶発的に各地域において住民主導によって自治的に図書館が整備された。それはむしろ昭和の終わりまでは案外ザラだったとは聞いています。実際にそういう体験をまとめた書籍も出ています。

特に西日本。東日本ではそういう活動が起こりにくい。図書館に関してだと西日本のレベルは高く、そうやって整備されてきたものが多いです。皆さんがご覧になられた瀬戸内市のもみわ広場、嶋田館長はそういったケースを多く見てこられたので、瀬戸内市でそれらを明確に意識して仕掛けようとしたと思いますね。

おっしゃるようにポピュリズムになる予感も私も懸念します。そこはお互いの信頼関係が大事になりますが、時として専門家を決めざるをえないこともあります。

これはおそらくまだ先の話ですが、設計者を選ぶ段階できっと大きな課題が出てきます。皆さんにとってぱっと見で分かりやすい、あるいはカッコいいと思う建築案を本当に選んでいいか？ という問題ですね。見た目が派手派手しくて「すごい！」というものに、ある意味、人は流されやすい。でもそれが本当にこの町に合うのかはすごく慎重に考えなくてははいけない。

梶原町がいい例です。あれは政策だからいいですが、費用負担を考えたらすごく大変になることは確定的です。それが町の決断であれば問題なしですが、設計者を選定する際にああいう案を見せられると、人はそっちに動きかねない。そしてそれは最終全体でやると判断を誤ることがある。ですからその時のために専門家はいたほうがいいと思います。

ただこれも一概には言えません。例えば土佐市。設計者選定を公開で行いました。市民の皆さんの前で。我が社も出ていましたが、ウチ負けました。その時に市民は正しいと思いました。というのは、私はプレゼンテーションが終わった瞬間に「負けた」と分かったんです。何故かと言うと、市民の目が全然輝かなかった。そのあとにプレゼンをしたのが私のライバルであり友人の建築家ですが、盛り上がってました。拍手とかしちやいけないんですが、頷きとか、人の所作までは止められないので。「ああ、ウケてるな」と。結果的に選ばれた案を見ると、「我々は負けたな」とよく分かりました。どっちが土佐市の市民のことをよく考えているか、彼の案のほうがよかった。

それは建てつけ・やり方次第ですが、場合によっては専門家に委ねる。あるいはみんなで決めてみんなで責任を取る。その辺はケースバイケースでなので、ここはぜひ計画策定の時に詰めていく必要がありますね。

さっき出ていた司書の皆さんのご意見を聞きたいとか相談するのも、本をどう並べるかということも、町民の観点によるか、皆さんが町の司書として雇っている専門家の方々の力を信頼するか。これにも絶対に正しい考え方はないです。皆さんとして何を選択されるかによります。

(内田委員長)

ありがとうございました。

ということで、少し基本構想の部分に戻って詰めておきたい部分があります。

もちろん漠然としていて何をどうまとめていくか曖昧ですが、例えば先ほどワークショップのまとめでは大きく4つの観点が出ていますね。交流とくつろぎの場、あるいは若者・

子どもたちの居場所。二つ目は、四万十町全体に広がる、四万十町全体が文化的施設なんだという視野と機能。それから、文化や図書に視点が当たりがちですが、モノ作りなどの機能なども持っているのが文化的施設と言えるのではないか。最後は、地域に暮らしながらも最先端のものに触れて、子どもたちの可能性を保証し、実現して支援していく。

それらを踏まえながら、新しい文化的施設のビジョンを巡って協議して、それらを拾う形でまとめていきたいと思います。

(下元委員)

当然ながら大きい枠での「人」の文化的施設のビジョンというよりは、「四万十町の文化的施設」？

(内田委員長)

そこは大事なことだと思います。町が立派になっても一人一人が立派にならなかつたら夢がないというか。一人一人が良くなってこそ町が良くなるんだという考えを大事にするなら、その表現が出てきていいですよ。町が良くなればというなら人が育たないといけない。あるいは一人一人が自分の可能性を発展させる力をつけていく、決定ができる施設があって、その延長線上に町があるんだという。

(ARG 岡本)

これはすごく大事だというフレーズを出していただければ、こちらでも組んでみますので。絶対にこの単語は入れておきたいというのは、皆さんの中にありますか？ キャッチフレーズ的な。

お勧めはなるべくシンプル。オープンしたあとに、職員や住民が「ここは何であるか」を振り返れるフレーズがあったらいいですね。

(酒井委員)

公募したいくらい。いやここでは意見出しますけど。公募したい。

(林(伸)委員)

文化的っていうのが広い意味で、文化っていうのがこの地域で起こるものだと思うんです。それを守る施設という意味なのか、それともこれから先を見据えての文化なのかで、ビジョンの作り方も違うと思います。子どもたちの未来を守ると、この土地の文化を守らないといけないっていうのでは意味が真逆だと思うんです。

今から先の新しい技術を取り入れてもったこうしたらいいねっていう文化を取り入れて「作りたい」っていうのと「守りたい」っていうのの二つあると思うんで、なんか難しいなって。

今見せてもらう文化は「先へ行く」ための文化だということですよ。そういう意見も取り入れてもらって。せっかく居るえらい先生のお知恵も借りて。せっかくだから「あってよかった」って言われる図書館にしたい。

(ARG 岡本)

私どもも合併自治体の仕事をしてきましたが、ここは本当に、判断を誤ると、せっかく三つの町で大きな力になっているものが損なわれてしまいます。せっかく出来る施設が地域間の断絶・対立を招くことは絶対にあってはならない。

あくまで今は窪川の町に建てますけど、「四万十町立図書館」をここだけをお願いするわけではなく、大正分館もありますし、十和もこれからどうするかの話もある。これからの計画の中で常にその視点を持ちましょうと強く打ち出すのは一つのいいやり方ではないかと。それは今後皆さんの話の中でも絶対に。

これから新しく町民の皆さんが興味を持って参加して下さると思いますが、その時に皆さんが後に続く人たちに何を伝えたいかを言葉にする必要があります。

議論をくり返される中で、大正や十和が発展するために窪川はどう発展するべきか、我々はそういう議論をしてきたのだと記録されたほうがよいと思います。次に繋がっていく人たちに何よりも最初にお話したいことは何であるか、言葉にすることが大切です。

(刈谷委員)

前におっしゃった、「ターゲット社会的に立場が一番弱い人」で、例えば十和の独居老人。自分では車も運転できなくて外に出て行くには公共交通機関を使うしかない人が一番使いやすい図書館にすることが、結果的には窪川と大正の人にも一番いい図書館になるというのはいいなと思っています。ここから一番遠いのが十和なのかははっきり分かりませんが。

条件的には子どもたちも同じであって、自分では出かけてはいけない。

あと、障害のある方、ハンデがある方をターゲットにすると、みんなにとっていいものになるのかと思っています。

それから、移動図書館研究会というのにちょろっと出てるんですけど、そのキャッチフレーズが「ポストの数ほど子どもの図書館を」。本当に郵便ポストの数くらい、規模は大きくなくても、どこにいても本にアクセスできる環境はすごく大事だと思います。四万十町でもそういう環境を整えてもらえたらと思う次第です。

(酒井委員)

私が皆さんに広げていただきたい意見としては、私自身がまさに子育て中なので、育てる対象がそれぞれ違っていても、ちゃんと「動いてる」って状態が大事で、どこかで止まって淀んでしまうとそこで固まって動かなくなってしまうって状態は四万十川が森から海に行く過程と同じで、まっすぐコンクリートで整えた川や水はやはり汚れるし、生き物も住みま

せん。蛇行していて、瀬もあって淵もあっての多様性だと思うんで、生まれるもの育てるものも違ってる。

結局、小さい子は上の人に育ててもらったら恩を下の世代に返すし、上の代にも返したくもなるわけで。

私、町づくり委員を十和でしてるんですけど、繋がりっていうのも大事で、繋がり繋がると所々杭のように留まる所がないと生き物は発生しないわけで、そういう大きい流れを大事にしたいなあ。すごく抽象的なことばかり言いましたけど。

(林(伸)委員)

僕らも「結」とか「繋ぐ」とか使うんで、大きく全体的に繋がれた感じに使えないかなあと。

(酒井委員)

繋がるためにはどこにアクセスすれば誰に繋がれるのかっていう仕組みがないと、例えば虫の研究者に会いたいと言って、図書館に行けば紹介してもらえとかあればそこで「繋がる」だし。そういった発想を皆さんが広げていったら助かるんですけど。既得権益を誰かが握ってたらそこで終わりじゃないですか？ 十和からしたら窪川のことなんか知らん！になるわけで。お互いの状況を知り合っていくほうが、お互いにいい環境で育っていけるんじゃないかなって思うんです。脳みそ繋がってシナプスを繋いでみたいない感じじゃないですか？ 自然現象が体の中で起こってるのと一緒だから。

(ARG 岡本)

よくある言い方にしてしまうと「ネットワーク」。

西ノ島町の「コミュニティ図書館」は小さな島なんでコミュニティの場を広く作るというのが大きくあったんですが。

四万十町で言うとネットワーク型の図書館かなあと、僕は皆さんの話を集約して思いました。

窪川にあるのモノも大事だし、十和・大正から来やすいことも大事だし、同時に「窪川に来なければ始まらない」にはしない。というのは、例えば大正分館は立派な分館だと思いますし、十和地域でこれからどうしていくかの議論も出ていますけど、それを決して忘れるわけではない。すぐ一気に実現するのはなかなか難しいですが、それはちゃんとみんなの中の共通認識として持って、窪川の人間もそのことは考える。逆に十和の人も窪川のことを考える。そういう形の図書館ネットワークの体制は有りなのかなと思います。文化的施設全体として。

四万十町は広域なので、かなり大事な点になってくると思われます。そこらの判断はすごく重要で、しっかり考えておかないと、将来にかなり影響を与えるんでしょうね。

人口予測グラフを見ていると、将来的にすっごく減るので、しっかり考えておかないと、三つの旧町村みんな共倒れになってしまいます。

(内田委員長)

ネットワーク型というのが今一つ、かっこよさがいいかな？

(林(伸)委員)

方言でネットワークとか繋ぐとかの単語があるといいのよね。

(ARG 岡本)

あとベタですけど四万十川に絡められたらいいとさっきからずっと思っています。

せっかく「四万十町」という町名を選ばれたわけですから、「四万十」を最大限に活用したほうがよくて、コンセプトも四万十川と結びついたものであるとみんなにもよく分かる感じは与えられると思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

四万十川もあるし、「流域」も最初の頃は言っておられましたよね。

「繋がる」と「広がる」と「高まる」「育つ」は入れたものがネットワークなわけですよ。

そこに多様性があるわけですよ。異文化、異業種、色んな人が繋がるっていうことが必要ですね。

(ARG 岡本)

自分を高めることがまず必要なわけですよ。もちろん子育て中のお子さんを立派な人間に育てていきたい・高めていきたいっていうのも常に前提として、自分自身が常に自分を高めていこうとするかが学びの本質だと思うので「高める」「高まる」はその町の文化の捉え方にふさわしいのかと思います。

(内田委員長)

あと「守る」と「生み出す」「作る」は矛盾するように思うけれども、そこは矛盾しないというかね？ 両方が成り立つことが大事ですよ？

【委員がそれぞれに思いつくフレーズを自由に出し合う】

(ARG 岡本)

それじゃあ確認します。

常に変わっていく部分。一方で落ち着ける部分も大事にしたい。それは人と繋がっていくという部分にも通じると思います。文化とは人との繋がりがあってこそなので、繋がっていくこと、広がっていくことは大事にしたい。

ただ対象があって一方的に何かするのではなく、自分自身がどう育つか、自分自身がどう高まるかという観点をなるべく大事にしたい。

こういう理解で大丈夫ですか？

次回からそんなに大きく変えられなくなると思います。会議回数から言っても、次回皆さんに草案を読んでもらって。まだ直せるところは直しますけども。でも「ビジョンはこれじゃない」となると全てやり直しになります。ビジョンがあってコンセプトがあってそのあとのアクションがあるので、ここが揺らぐと今年度で終わらないことも皆さんご承知ください。

今頂いた意見をまとめて、役場とも議論して、まとめます。

・その他

(内田委員長)

それでは次回の日程をご相談したいと思います。

(事務局によると) 次回が1月22日(火)になりますが、午後に13:00~17:00くらいの枠を取っていただいて、基本構想の協議をするということによろしいでしょうか？

【反対意見なし】

場所はまた事務局から連絡いただきたいと思います。

(事務局)

事務局からは1月22日に構想(案)を出させていただいて、2月にこの検討委員会で決定させてもらって町長に承認してもらおうという形でやらせてもらいます。

それとできればまた勉強しながら視察にも行けたらと考えています。

【事務局から委員の任期延長について説明】

(内田委員長)

それでは以上で終わります。皆さん、ありがとうございました。